

のコミュニケーション空間でもあるわけです。PMOはエントランス空間を街の界限として発想しています。まさにサービスの表現であるとも考えているのです。

似たようなことは、2005年に完成した東京系井重里事務所をデザインした時にもありました。本人の「ベンチかな」というリクエストを受け、私は形をつくるデザインをまず止めました。そして、オフィスという枠にとられず、コミュニケーションについて思考を巡らせました。縁側に代表されるように日本人のコミュニケーションの原風景は、真正面で向き合うよりも横座りをして空を見ながら話す気配の場。そんなことをヒントに、居場所が見え隠れして気配を作り出すようなオフィスを提案しました。

コミュニケーションの ALL JAPANで世界へ

会社の業務とは別に2004年から日本商環境設計家協会の理事長に就任し、インテリアデザイン界にある様々な課題解決に取り組み始めました。一つはデザインアワードの改革です。審査員を変えたり、海外にも応募を呼びかけたり、審査を公開するようになったのです。すると、飛躍的に応募

募総数が増えました。

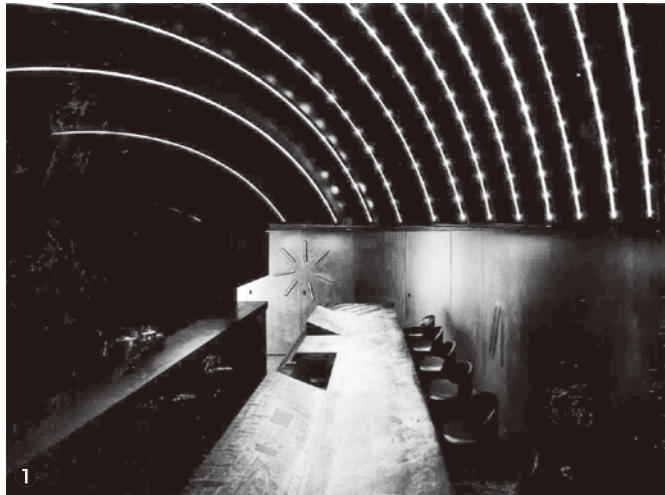
2019年からは、「JCD Design Award」と日本空間デザイン協会の「日本空間デザイン賞」を統合して、「日本空間デザイン賞 || KUKAN DESIGN AWARD」を新たにスタートさせます。この賞の名前には、インテリアのイの字も、商環境の商の字も含まれていません。もはやインテリアデザイナーという肩書きも、私の世代が最後になるのかもしれない。これまで同じ空間をデザインする職能団体であるにもかかわらず、それぞれの職域によって、多くの団体が設立されてきました。しかし、そういう職域によって分けられる時代は終わっています。デザインは、社会全体のアッセンブルの中で相互的に機能していますから。その典型的な一つの例がインテリアの世界と想っています。空間系アワードの統合の背景には、アジアの台頭があります。今日本の空間デザイン界は、アジア勢に押されつつあるのです。

現在、香港、ソウル、台北、東京、シンガポールの5都市のデザイン団体が、順にホストを務め、フォーラム、シンポジウム、ワークショップ、展覧会などを通してデザインの交流を図る EAST GATHERING(EG)

を進めています。国策としてデザイン振興を進めている香港や台北では、EGのゲストとして訪れた各国学生全員分の費用をホスト国が負担してくれるほどで、日本では考えられません。

相手が国策となると、個々の団体が単独に活動していても太刀打ちできません。そこで、各団体が一致団結して世界とつながりながら、発言権を獲得していく必要があります。そのため2017年から、インテリア関連25団体が一堂に会する意見交換会 I D M || Interior Design Meeting を始めました。デザインアワードの統合は、そうした動向の一つでもあります。

アジア諸国にはまだ日本のインテリアデザインに対する敬意が残っています。私は、後輩たちには再び日本がアジアのデザイン界を牽引しているようにデザイン界を盛り上げていってほしいと願っています。



1



2



3

- ① パーラジオ
彫刻家若林奮と協働の、高密度なインテリアを担当。
- ② 5S NEW YORK
ニューヨークSoHoの資生堂グローバル戦略店舗。
- ③ 東京系井重里事務所
ウディ・アレンの書が掛かるほぼ日刊イトイ新聞のオフィス。